

主の洗礼

マルコ 1・7-11

2021.1.10

高円寺教会 9:30 ミサ

クラレチアン宣教会 うめざき たかいち 梅崎 隆一神父

大阪にいた頃、十代の女の子が「わたしは天使の梯子を見たことがある」と言ったのでヤコブの再来かと思ってびっくりしたことがあります。説明を聴くと天使の梯子とは、雲の切れ間から太陽の光線が伸びている状態のことだと分かりました。なるほどなあ…と感心しました。

今日の福音では、イエスが洗礼を受けると、天が裂けます。天が裂けるということは、暗雲が立ち込めていた空から、裂け目ができて、そこから一条の光が地上を照らすような、そんなイメージです。こういったシーンは子どもの頃、アニメによく登場していました。重たい雲が裂けて、そこから光が差し込む。光に音はないのですが、ちゃんと神々しい音が付加されて、更に増幅されました。わたしの中で、今日の福音を聴くと、その光景がすっかり固定されていることを改めて感じました。

やがてイエスが殺され、神殿の至聖所の天幕が上から下まで真二つに裂けるという出来事が起こります。イエスの公生活は、覆っていたものが裂かれることによって終始している。雲から裂け目ができて光が出る。やがてイエスが亡くなったときには、至聖所の幕が真二つに裂ける。イエスによって、わたしたちを覆っていた闇から光が差しして、わたしたちの希望の光が神を見ることであることが分かるようになった。

イエスが洗礼を受けることで、同じ洗礼を受けたわたしたちもイエスと同じ体験をする者となります。わたしたちは、もしかしたら幼児洗礼でその頃の記憶もないかもしれないけれど、確かにそこには聖霊が下って来て、神と人とを遮る暗雲が裂け、この世界に光をもたらす者になる。それは聖霊によるのであって、あなたの能力とは関係がないので、そんなに心配しなくてもいいと教えてください。

イエスが冤罪によって十字架に架けられて、宗教的には神に呪われた人として殺されることになりましたけれども、神殿の垂れ幕が裂ける。そして、それが起こったときに百人隊長という人が、「ああ、あの人は本当に神の子だった」と

信仰を告白することになります。百人隊長は、イエスを殺す側に立っていた人であり、ユダヤ人ではなくて、他の神様を信じていた人でした。でも、そんな彼が仕事の現場の中でそういった大切なことに気付くことになります。

洗礼を受けた人は、神様の子どもとして生きるのですから、イエス様と同じように、全ての人に憎まれる可能性もあります。それから、身に覚えのないことで迫害を受けることもあるかもしれません。しかし神の子どもであることは、この世の力によって取り去られることはありません。むしろ、この世界の罪を取り除く神の小羊となっていく。「あなたたちはどんなに非力で弱い存在であるとしても、必ずこの世界の中に光をもたらす者となることを、あなたは本当に信じているのですか？」と今日もわたしたちに問いかけられます。イエスが神の子であったように、わたしたちも、洗礼によって神の子となった人は、光の子となってこの世界の暗雲を切り裂いて光をもたらす者となります。

聖霊に促されてこの世の闇に光を与える行為が、必ずしもこの世で認められるわけではなく、無力にしか見えないことがほとんどです。場合によっては、イエスが浴びせられたような罵声というものをわたしたちも浴びせられる可能性があります。「今直ぐ十字架から降りて来い。そうすれば信じてやる」とののしられるかもしれません。しかし、自他ともに無力であると感じる瞬間があったとしても、神の子としての生き方は必ず闇を裂き、ののしている人の心に光をもたらすものとなります。

わたしたちは今日成人のお祝いもまた共に祝っています。人生の中で神の子としての命をいただく、節目の時期というのはいつもやってきます。この善き日に新たな気持ちで神の子を生きる思いを、もう一度力強く宣言することができますよう共に祈りましょう。